

図書館

THE LIBRARY

Monthly Special

外国人労働者問題が教える 国際化時代「ニッポンの現実」

社会学者 橋爪大三郎

一九八九年。このわずか一年で、戦後数十年続いた米ソの冷戦構造の崩れ去ったことが、誰の目にも明らかになった。その後「ドイツ統一」、ヨーロッパ統合のピッチが早まるいっぽう、ソ連はいよいよタガがゆるんできている。ポスト鄧小平の中国の進路も予断を許さない。東欧の激変がアジアに揺れもどし、朝鮮半島に変化が起ころうとする気配もある。日本の巨大化が、こうした大変動の原因のかなりの部分を占めていることを、よく肝に銘じなければならぬ。日本は、大東亜共栄圏の当時と比較にならない規模で、世界中の資源を呑みこみ、世界中に製品を吐き出している。日本の資金や技術が

ちよつと移動するだけで、たちまち他の国々に大きな影響が及ぶまてになった。日本は、否応なしの国際化時代を迎えている。とまどいがちなわれわれのために、さまざまな処方箋を掲げた書物が店頭に並んでいる。そんな新刊の一冊が、澤田昭夫・門脇厚司編「日本人の国際化」(日本経済新聞社・一八〇〇円)だ。編者らを中心とする、三年間にわたるプロジェクト「日本人の国際化推進に関する研究」をふまえており、入門書として好適だ。知日派外国人二百人へのインタビュー、海外駐在員、英語教員、一時滞在外国人子女の受け入れ校などの調査をまとめたのだ

深刻な労働力不足

「国際化」しなければならぬとまでは、みんなわかっている。しかしその実、浴衣のままホテルのロビーをうろうろしている感じで、わが身のどこをどう国際フォーマーケットに直せばいいのか、肝腎のそこがわかっていない。自動車の輸出台数、防衛予算、コム違反、農産物輸入自由化、半導体交渉、構造協議、ODAから、昨今は公共投資、選挙制度改革や土地政策にまで、アメリカやECの目が光る時代である。そして去年は、「偽装難民」がどつと上陸の強烈パンチ。いままでの、ほんとと日を送ってきたツケが、回ってこないはずがなかった、遅ま

きながら気づかされた。難民のふりをして、日本に入国しようとするのは、偽装難民なのか、それとも、政治難民に準ずる経済難民か。ボートがつぎつぎ漂着した去年の夏、われわれ日本人の反応はヒステリーにみまっていた。そのあたりの周章狼狽、混乱ぶりは、たとえば「東京難民戦争」(同時代批評ブックレット3、青峰社・五〇〇円)や、「朝まで生テレビ」を採録した「激論」(外国人労働者)(テレビ朝日・一〇〇〇円)にもよくうかがえる。それが一段落したあと、法体系や政策議論の立ち遅れにも、ようやく目が向いていった。単純労働力の流入を建前上、認めない現行の入管法と、就労ビザ、観光ビザで入国する「不法労働力」との矛盾。その背景にある、若者の3K(キツイ・キタナイ・ケケン)業種離れと極端な人手不足……



最も信頼できる読み手による現代の第一級思想家の全貌 橋爪大三郎 ● 社会学

掛け値なしに第一級の現代思想家、M・フーコーが逝って早や六年。『狂気の歴史』『言葉と物』『監獄の誕生』『性の歴史』など構造主義以降の時代を拓いた重量級の著作群が、いよいよ輝きを増して継承者を待っている。そんな折、フーコーの読み手として最も信頼のおける内田隆三氏が、一般読者向き概説書を著した。そこそこ気になりながら、フーコーの全貌を掴みあぐねていた向きにはうってつけの一冊である。生前の伝記などをまとめた序章に続き、「フーコーの望遠鏡」「変貌するエビステメー」「外の思考」「権力と主体の問題」の四章構成。ともすれば錯綜して見えるフーコーの論述を、いく本かの補助線にそって、ズバリと切り分ける。本質的な論点を読みとるコツを手ほどきしてくれていてありがたい。例えば、どんな時代の思考を支える場



ルネ・マグリットの作品などもうまく織りこみながら、フーコーの仕事が構造主義とどれほど隔たったものなのか、説得的に語っている。▲サドからカントの時代以降二世紀近く……、西欧の言語は……「人間」によって占拠され、……人間の主体性主観性によって……その形態を保ってきた……人間の経験の内面にいるかぎり……この言語に致命的な過不足を見出すことはできない。だが、人間の主体性主観性の「外」に経験の可能性を求めるとき……この言語の存在、この度しがたい有限性に直面する。フーコーは言語をその外側から、出来事として捉えようとした。そうすることで、ニイチエの系譜学を受け継ぎ、生涯をかけて、西欧という思考の枠組みの外へ抜け出ることをはかったのだ。そのためのユニークな試みが、言説分析、権力分析である。この「権力の問題系」を論じるのが、終章「権力と主体の問題」の前半。後半ではそれと境を接する「自己の問題系」を論ずる。最晩年のフ

ーコーは、なぜ執拗に、古典古代の「人間の美学的・倫理的な主体化の様式」を追い始めたのか。前々から不思議に思っていた。内田氏もどこか尻切れトンボにこの本を終えている。心ならずも人生を中断し、多くの問題をオープンに残したフーコーの紹介としては、これでもいいのかもしれない。ところで本書は、フーコーをまったく読んだことのない読者にはとつきにくい用語や言い回しもあって、ちょっと不親切だ。いっぽうフーコーはとくに有名な「監視」という読者には、せつなく内田氏が書くのだから、もう一歩突っ込んだ読み込みも欲しかった

小倉利丸 ● 経済学

本書の内容は、訳者が「あとがき」で述べているところによれば、一九六六年から一〇年に及ぶ文化大革命の時期に「林彪と四人組」一味が党と国家指導者および各階層、分野の人たちに加えた迫害の事実を摘発し、一連の事件の真相をあげたものである。原書は一九八七年に全三巻五三編で出版されたが、訳書ではそのなかから一〇編が選ばれている。この中には、日本でもよく

中公新書

6月新刊 絶賛発売中

974 愛のうた 中華愛誦詩選
竹内 実
詩の宝庫・中華世界から愛を
誦した名詩を選び 7000円

975 徳一と最澄
高橋富雄
天台・真言と正義を争った徳
一とは何者なのか 5200円

976 水を訪れる
山口嘉之
入浴様式の違いを基に水文化
のあり方を考える 6000円

977 軍師・参謀
小和田哲男
山本勘助・真田幸村・竹中半兵衛
の事績を洗う 6200円

984 アカデミー賞
川本三郎
スター・監督・製作者たちの逸話が
アメリカで最高の栄誉を華麗に彩る
5版 5000円

985 雨森芳洲(あめのもり)
元禄享保の国策家
上垣外憲一
先の訪日・善隣友好の先駆者として
韓国大統領が言及した対馬藩の儒者
3版 5000円

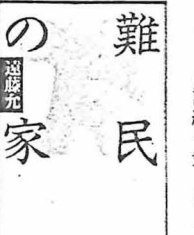
中央公論社
〒104東京・京橋2-8-7 振替東京2-34

きあい下手なのは、いろいろ歴史的背景もあろう。在日外国人のトッポは、言うまでもなく韓国・朝鮮人。われわれの、つぐないのような過去の愚行の証左であり、その後もほとんど有効な手立てを施せないでいる意慢の、なにより証人でもある外国人と日本人をつなぐ共通の原理——市民権なり人権なりを、われわれがよく理解していれば、そして日本社会がその原理に忠実だったら、こういう愚かさは避けられたに違いないのだが。

手近な範囲での実行
在日韓国・朝鮮人の人びとが、いざ公務員をめざそうという場合、実に重宝。まことに丁寧、かつ実践的な努力には敬服する。県庁・市役所・教員とも、一九八八年の採用状況にもとづくデータで、ちよつと古いが、この本を編集する段階で、問

援助の手にも助けられて、このほど医師の国家試験を見事パスした(ベトナム)難民少女の十年——吹浦忠正構成、中央公論社・九八〇円。

書・五四〇円は、小冊子ながら、考えるべきポイントをよく押さえている。西ドイツに一家で三年居住した経験を踏まえて、同国の例を中心に、出稼ぎ型労働者の受け入れ、滞在長期化、第二世代誕生、第二世代が受け入れ国文化に同化し受け入れ国の文化伝統との不整合、下層労働への定着、「内なる開国」の失敗、というシナリオを描いてみせる。単純労働者に限って入国を自由化しようという、よくある安易な発想の、問題点はここだろう。



「在日」外国人
「在日」外国人の現状と課題を、最新の統計データに基づいて詳しく分析する。外国人労働者の増加、市民権取得の動き、教育・医療へのアクセスなど、多岐にわたる問題を網羅的に解説する。

最近では私も、遅まきながら中国語を習い、留学生の保証人を務めている。外国からの友人も増えた。手近な範囲で手をさしのべ、理解を深めあうことがますます大切だ。

「在日」外国人
「在日」外国人の現状と課題を、最新の統計データに基づいて詳しく分析する。外国人労働者の増加、市民権取得の動き、教育・医療へのアクセスなど、多岐にわたる問題を網羅的に解説する。

最近では私も、遅まきながら中国語を習い、留学生の保証人を務めている。外国からの友人も増えた。手近な範囲で手をさしのべ、理解を深めあうことがますます大切だ。

「在日」外国人
「在日」外国人の現状と課題を、最新の統計データに基づいて詳しく分析する。外国人労働者の増加、市民権取得の動き、教育・医療へのアクセスなど、多岐にわたる問題を網羅的に解説する。

最近では私も、遅まきながら中国語を習い、留学生の保証人を務めている。外国からの友人も増えた。手近な範囲で手をさしのべ、理解を深めあうことがますます大切だ。

きられる、一時の西ドイツみたいな選択をすればよいのだろうか？
問題の歴史的、社会的背景を考えろうえで、長谷川慶太郎著「国家が見捨てられるとき」——難民・外国人労働者の背景(東洋経済新報社・二二〇〇円)が、まず参考になる。

指針が得られる。それをふまえて、長谷川氏は、労働力受け入れの原則禁止を提言する。

もちろん誰もが、こううまくゆくわけではない。目に見えぬ差別。ラオス人、ベトナム人、中国人など、難民相互の民族的反目。遠藤允の「難民の家」(講談社・一七〇〇円)は、決してまとまりがよいと言えない大冊だが、それゆえかえって、難民を迎えてグクシヤク右左左往の日本のあるまを描き出している。

書・五四〇円は、小冊子ながら、考えるべきポイントをよく押さえている。西ドイツに一家で三年居住した経験を踏まえて、同国の例を中心に、出稼ぎ型労働者の受け入れ、滞在長期化、第二世代誕生、第二世代が受け入れ国文化に同化し受け入れ国の文化伝統との不整合、下層労働への定着、「内なる開国」の失敗、というシナリオを描いてみせる。

刈間文俊訳
新書判・239頁・550円
隣談社

等に発表した諸論文を収録したものであるが、行政学上の基本的諸概念を粗に載せ、それらを「有効な概念装置に再構成」する試みという点で、一貫している。

ここで検討の対象となっている概念の中には、「行政需要」「効率と能率」「行政裁量」「行政責任」「自治」「政府間関係」「集権と分権」などが含まれるが、著者がきわめて説得的に論じているように、従来ほとんど無批判的に受け入れられ使用されてきたこれらの概念は、しばしば多義的であったり、またあいまいな含意のまま用いられている場合も少なくない。戦後のわが国の行政の嚮導的原則の一つとみなされてきた「能率」の概念にしても、この概念を生み出した当のアメリカにおいてさえ、「今日においてもなお、確定した意味内容を与えられていない」のである。

このような著者の論点をもっとも明快に示し、しかも全体の議論の導入部となっているのが、本書中の唯一の書き下ろし部分である第一章「行政の概念」にほかならない。著者は、ここで「行政とは何か、何であるべきか」という問いから出発する。一般的には、このような問いへの答えは、あまりにも自明であり、

問い自体が陳腐であるように思えるかもしれない。ところが、著者によると、「そもそも政府は何をなし何をなすべきでないか」という問いに對して、「現在の行政学は明確な回答を持ち合わせていない」のである。

著者が適切に整理しているところによると、行政概念には三類型が認められるという。第一は、立法・司法・行政という三権分立制度を前提とする用語法に、第二は、政治と行政の対抗関係を前提とした用語法に、第三は、執政・行政・業務の区別を前提とした用語法に対応する。ちなみに第一の用語法は、絶対君主制から立憲君主制へと移行したヨーロッパ大陸諸国で、第二の用語法は、議院内閣制の発展・確立を背景とするイギリスで、第三の用語法は、二〇世紀初頭以来のアメリカで、それぞれ形成されてきた。そして、著者は、「行政」の概念の錯綜は、今日の民主制下の国々で、「これら三類型の行政概念が重疊的に定着しており、そのときどきの文脈に応じて併用」されていることによるとみる。

原点に立ち返って

本書を通じての著者のもう一つの論点として注目し値するのは、わが

国での政治・行政関係をめぐる論議が、とかく「アメリカでの論議に引きずられている」なかで、「アメリカ行政学界の政治・行政論議の特殊性」に注意を喚起し、わが国での議論を生産的にするために、「アメリカ行政学から身を離して」、「ヨーロッパ先進諸国の伝統とそこでの論議」に立ち返る必要を提起している点であろう。

実際問題として、一九世紀末に誕生した現代行政学は、アメリカを母国とし、革新主義時代の文脈で、特

評者●橋爪 大三郎（社会学者）

ウィリアム・W・バートリー著

小河原 誠訳

『ウィットゲンシュタインと同性愛』

「哲学に興味を失った」一〇年間に焦点

一九七三年に出版されるや、たちまち大きな反響を呼んだ問題の書の翻訳である。その理由は、書名から察せられよう。原題は『ウィットゲンシュタイン』だが、本書がひきおこした論争からすれば、この書名こそもっともふさわしいと判断した（訳者あとがき）小河原氏が、『同性愛』を付け加えた。

ウィットゲンシュタインが同性愛者であった事実を目をつぶったなら、生涯にわたる彼の苦悩を理解できなくなってしまうというのが、著者バートリーの主張である。けれども、同

性愛をじかに論じた部分は、書名から予想されるほど多くない。『約四、五頁にわたってごく手短かに言及されている』（213頁）にすぎない。それよりも『本書の眼目』は、『彼の「失われた年月」、すなわち、小学校教師時代』（訳者あとがき）に焦点をあてたところにある。

ウィットゲンシュタインには、『論理哲学論考』を執筆した若い日々から、ケンブリッジに戻る四〇歳までの間に、空白の一〇年間があった。彼はこの期間、オーストリアの寒村で小学校の教師を務め、そのあと園丁をしたり、姉の邸宅の設計・建築にたずさわったりしていた。哲学にまったく興味を失った時期として、これまで人びとの関心をひくことがなかった。

著者バートリーが一九六七年に、たまたまその寒村をたずね、いまは年老いた彼の教え子たちに出逢ったことが、本書を生むきっかけになった。村人たちは、教師ウィットゲンシュタインのことをよく覚えていて、興味ぶかい証言をした。その結果、著者は、この時期こそ、前期（論理学研究の時代）と後期（言語ゲームの時代）とをつなぐ、きわめて重要な時期であるとの結論に達する。

たとえば「嘘つきのパラドクス」を、ウィットゲンシュタインは子供たちに教えている。また、彼の教育法は、当時オーストリアで試みられていた、ゲシュタルト心理学の流れをくむカール・ビューラーの学校改革運動と軌を一にしている。岩石を採集し山野を歩き、模擬装置をこしら

え、『小学生のための単語帳』をこしらえたウィットゲンシュタインの実践は、この運動の精神を体現するものである。

こう考えてくると、『哲学探究』の言語ゲームの議論も、この延長上で理解できそう。すなわちそれは、『児童言語心理学の概要を展開する試み』『子供は母国語をどう習得するのか』という問題に焦点をあてて（173頁）たものなのだ。

真相は闇の中

著者バートリーは、ウィットゲンシュタインその人の人格に尊敬の念を隠さないが、彼の哲学には極めて批判的である。批判のすべてが納得できるものとは思わなかったが、本書が、ウィットゲンシュタインについて

殊アメリカ的な課題への応答を軸として発展してきたのであり、いわゆる「政治・行政分析論」「政治・行政融合論」にしても、このようなアメリカ的文脈と密接に関連しているのである。

本書は、もともと政治・行政の専門研究者ないし行政実務家を主たる読者対象としているが、政治・行政上の改革構想が時代の課題である今日、著者の原点に立ち返った議論の、改革の方位への示唆力は、広く一般読者の知的関心を刺激してやまない。

未来社
2884円

法律文化社

〒603京都市北区上賀茂先斗町71
☎075(731)7131 振替京部2-10617

アフリカの政治を読む

川端正久著 ●2369円
一党支配・クーデター・内戦という図式をたどりながら、多くの難民をかかえ苦渋にみちた現代アフリカ。著者の実体験をふまえ、人々の日常生活からアフリカの今日と今後を展開する。

変貌する社会と文化

本田融男・佐々木雄代三編 ●2389円
生産・労働の生活面と消費・風俗のそれとを分析・解明しつつ、混迷する現代の歴史的位相を確認。「日本的なるもの」の現象や構造に焦点をあて、現代日本のもうさを描き出す。

セクシャル・ハラセメントの社会学

モダーン・セクシズム ●2575円
ベノクレイアスほか／千葉モト子訳
日常生活に存在するあらゆる差別現象を三つの型―あからさまな・巧妙な・目にはみえない―に分けて実証。セクシズムの変遷をたどり解決策を具体的に提示。

施設の欠陥と製造物責任

植木 哲編 ●3296円
ごみ焼却施設でおこった事故の全貌を整理した記録と論文。施設の技術的・構造的欠陥を指摘しながら、その危険性を明らかにし、今後の改善に資する。

Agama

硬質で透明な

知的人間の物語

橋爪大三郎

小ぶりの造本ながら、身がしまっている。十指にあまる材料を丁寧に読みこなして練りあげた、手応えのある一冊だ。

題名を見て、はて、ワイトゲンシュタインが宗教に関わりをもっていたらうか、と疑問に思う向きもあるう。無理もない。彼が普通の意味で、ある宗教を信じていたとか、どこかの教会に所属していたとかいうことはないからだ。本書にもこのうのべてある、『ワイトゲンシュタインが』制度としての宗教を否定的に考えていたこと(一一六頁)は明らかである、と。にもかかわらず、ワイトゲンシュタインその人の思想と生活は、終生、強固な宗教的動機に貫かれていたと、著者は主張する。

それでは、ワイトゲンシュタインが『宗教者』であるとは、どういうことなのだろう。著者星川氏はまず、ワイトゲンシュタイン

ンと論理実証主義者たちとの相違に、われわれの注意をうながす。

たとえば『論理哲学論考』の、あの有名な結句「語りえぬものについては、沈黙し

なければならぬ」を、どう考えるか。両者は、表面上類似したことを言っているみたいだが、『根本的なところでは全く対立する見解をいっている』(二一五頁)。

論理実証主義の人々とはそもそも、『語りえぬもの』の存在を否定する(一一七頁)。(そうしたものは存在しえないし、それに何らの価値もない)が彼らの信念なのである。それに対してワイトゲンシュタインは『語りえないもの……倫理』『宗教』『神秘的なもの』などを価値あるものとして、積極的に『位置づけ……している』(一一六頁)。

このような彼の立場からすれば当然、論理実証主義者の行き方は、不満なものに映

ぬもの」への畏怖・畏敬を片時も忘れず、思想(思うこと)、行動(なすこと)を一元的に統合しようと歩みつつけることにほかならない。これは、ふつうの意味での宗教よりも、はるかに単純で、徹底した生き方である。



星川啓慈=著
『宗教者ワイトゲンシュタイン』(法蔵館)

人生に置き、宗教に心の糧を求めようとする読者にとって、ワイトゲンシュタインの生涯をつぶさに知ることから、直接に得るところがどれだけあるものなのか、私にはわからない。しかし少なくとも、ここに描かれているのは、ユダヤ・キリスト教文

る。『論理実証主義のごとく、後者(『学問や科学の領域』)にしか適用できない手法を前者(『宗教や倫理の領域』)にも適用しようなどというのは、愚の骨頂』(二二頁)だ。

結局、『論考』は、語りうることは何かを残らず示してしまうことによって、逆に、語りえないことの広がり、大きさを示すところに、その本当のねらいがあった。著者は面白い比喩を使っている。『大洋に浮ぶ島にたとえれば……島の内側から……海岸線を明確にしても、大洋の本当の巨大さは理解できない。視点を変えて、大洋の方から、それもその上空から島を見れば、その島がいかに小さなものであるかが理解できる』(二〇四頁)。

ワイトゲンシュタインの目ざしたところがこのようであったとして、それでは、ワイトゲンシュタインを導いた、この逆説的な(『語りうることを語る』)ことによって、語りえないことに近づこうという)熱情は、何に由来するのか。

星川氏は、いくつかの補助線を引く。まず、ユダヤ系ドイツ人としての彼の、家庭

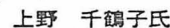
化圏からなら現われても不思議でないタイプの、硬質で透明な知的人間の物語なのである。『神を知らない』わが国の読者たちにとって、恐らくこれは驚きであろう。

著者は、ワイトゲンシュタインを知る人々との証言や、ワイトゲンシュタイン自らの著作・遺稿・書簡からの引用など、関係するテキストを丹念につなぎ合わせ、『宗教者』としての彼の生きざまを浮きぼりにした。しかも、ワイトゲンシュタインが語っていないことがらについて、推測をまじえて不必要に語りすぎてしまうという危険を、賢明にも避けている。類書を読破したうえで、要領のよいまとめも見えようが、適度に抑制された筆致が、かえってワイトゲンシュタインの非凡で身近な実像を照らし出すことに成功している。

なお、ワイトゲンシュタインと神学との結びつきについて、著者星川氏の手になる翻訳(A・キートリー『ワイトゲンシュタイン・文法・神』法蔵館)があることを、付言しておく。

(はしづめだいさぶろう・東京工業大学)

上野千鶴子著「家父長制と資本制」を読む



★うえの・ちづこ氏は京都精華大学助教授・社会学専攻。京大大学院博士課程修了。著書に「女は世界を救えるか」「構造主義の冒険」「女という快楽」「スカートの下の劇場」など。一九四八（昭和23）年生。

丹念な論理の運びと豊富なデータの裏付けによって

「解放の思想は解放の理論を必要とする」——日本のフェミニズムの代表的理論家の一、上野千鶴子氏は、最新刊の著書『家父長制と資本制——マルクス主義フェミニズムの地平』をこう書き始めている。理論を欠いた思想は教条に陥る。では、上野氏が依拠する解放の理論とは何か？「家父長制と資本制」では、それはマルクス主義フェミニズムとして提示されている。女性抑圧の根本問題を資本制と家父長制の弁証法的関係から説明したこの作品にふれて、橋爪大三郎氏に書評を寄せてもらった。

（編集部）

理されてわかりやすいものになつてゐるはずである▼（あとがき）と、著者も自信をのぞかせてゐる。

その眞を開いても、世界中のフェミニストからの引用が目につくが、本書はもう人文学説紹介に終始するちんまりした本でない。「理論篇」「分析篇」の二つのパートからなり、現代社会で女性が置かれた状況を分析して、骨格のくっきりした図柄を描き出すことを目的にしている。本書を遍読するなら著者上野氏が、結局ひとつのこと（だけ）をある。

資本制として分析する理論。フェミニズムは家庭を、家父長制として分析する理論とどちらも他に還元できないといふ意味で、二元論だ。▲マルクス主義フェミニズムは、階級支配二元説も、性支配二元説もとらない。とりあえず資本制と家父長制という二つの社会領域の並存を認めて、その間に「弁証法的関係」を考へる▼（二六頁）。この弁証法的関係の上に成り立つ、近代社会に固有の歴史的な形態である「家父長制的資本制」で

▽▽▽
家父長制的資本制

「マルクス主義フェミニズム」の裏付けによって、私や多く
ム——その可能性と限界」との読者に納得できるものにな
いう題で、「思想の科学」誌 っている。

上に足かけ三年、計十四回にわたり連載された論文が、単行本になって帰ってきた。当時から評価が高かったうえ、今回は寄せられた批判に対する反批判も書き加えられた。▲構成を大幅に変え、リライ、トヤ補足を大幅につけ加えた本書は、連載時より論点が整理されてわかりやすいものになっているはずである▼（あとがき）と、著者も自信をのぞかせている。

結論から先に言うとう、著者上野氏の立脚するマルクス主義フェミニズムは、▲女性の抑圧の構造を説明するには、「マルクス主義」と「フェミニズム」の二つの理論装置が、二つながら必要であることを認める立場▼（一頁）である。マルクス主義は市場を、資本制として分析する理論。フェミニズムは家庭を、家長制として分析する理論。どちらも他に還元できないとい

現代社会で女性が置かれた状況を分析
し骨格のくっきりした図柄を描き出す
丹念な論理の運びと豊富なデータの裏付けによって

抑圧の物質的根拠

用語の意味を取り違えやすいので注意が必要だが、まず「マルクス主義フェミニズム」とはなにか。これは、普通のマルクス主義でない。上野氏によれば、△女性の抑圧を説明するフェミニズムの解放理論▽には△1・社会主義婦人解放論、2・ラディカル・フェミニズム、3・マルクス主義フェミニズム▽の△三つがあり、また三つしかなかった



橋爪 大三郎

く、この1と2の△統合もしくは止揚として登場した。▽
 ▲フエミニストの視点からマルクスの原典という聖域を侵犯し、その改訂を辞さない一群のチャレンジングな人びとだけを、私はマルクス主義フエミニストと呼ぶ。▽（二二頁）

う氏は東京工業大学助教授・社会学専攻。東大大学院博士課程修了。著書に「言語ゲームと社会理論」「仏教の言説戦略」「はじめての構造主義」「冒険としての社会科学」など。一九四八(昭和23)年生。

つぎに「一家父長制」なか
これは歴史上成立した古代ロ
ーマの大家族制度のことでも

ないし、人類学者が部族社会に見出す長老支配のこともない。資本制の発展と相たずさえて成立した近代家族（ブルジョワ単婚家族こそ、その典型である。要するに▲家長制とは、家族のうちに、年長の男性が權威を握っている制度を言う。▼ われわれが現に営んでいる家族は、▲性と年齢（世代）を編成原理とした制度であり、この中では性と年齢に応じて、役割と權威が不均等に配分されて

の成立が、二重のプロセスだったとらえる。すなわち方で市民社会は、貨幣による交換のシステム、すなわち市場を展開させてゆき、資本を完成した。だが市場は、会の全域にわたるシステム（閉鎖系）でない。その背後に、市場の論理に服さない対物、すなわち家父長制的族を生み出さざるをえなかった。この結果女性は、家族でも市場でも、たかたか二の存在（市民）と位置づけ

に結びつくのかとなると、必ずしも明確でない。家族を破壊したあと、性や出産をめぐるどのような社会関係を形成しようとする案なのか、見えにくいのである。

この点を意識してか、著者は、フェミニズムの限界を指摘してもいる。▲レイシズム（人種差別）やエイジズム（年齢差別）にまで射程が届くわけではない。▼だから三元論のその先をいき、▲さらなる多元論を求めざるべきなの

家族の性／世代間支配の物質的基盤を破壊し、家族の凝集力を、ただたんに心理的基盤の上にのみ置くための試みである。▼（二〇七頁）

このように、マルクス主義フェミニズムの立場にもとづき本書の与える分析と診断は、首尾一貫して明快である。ただし、それがどのようなフェミニスト・オルタナティブ（記述的立場）

である。V(二七六頁)この主張に賛成したい。

家父長制と資本制

マックス・ウェーバーの論議の提示

上野千鶴子著

男の新しい側面!!!

現代を突き進める社会が何を求めたか
フェミニズム理論の進化図

朝日新書 定価2000円(税別) 2007.12.19

46判・334頁・2500円
岩波書店

主張に賛成したい。
フェミニズムの登場は、性

差別的な世界を築けるのに不可欠な要因であることを気付かされたという点で衝撃的だった。ラディカル・フェミニズムは、それが唯一最大の要因であるとさえ主張した。二元

れてしまう。こうした抑圧の構造にはそれ相応の理由（物質的根拠があるというのが、マルクス主義フェミニズムの主張である。

「オロギー」など継承すべき重要な概念をそなえているが、女性性の抑圧は階級支配の従属変数^④（四頁）だとしか考えない。またラディカル・フェミニズムは、父家長制の性差別の相対的な説明力はますます小さくなるだろう。そ

このように考へれば、これまでの女性解放論が批判すべきものとなるのは当然だ。まず▲近代主義的なブルジョワ女性解放思想は▲「抑圧の構造」を分析する理論装置を……持たない▲ため、▲啓蒙もしくは運動論に帰着する▲（二二―四頁）。つぎにマルクス主義（社会主義女性解放論は、「再生産」「イデオ

概念をたて、女性の抑圧を独立変数として取り出した点が画期的だったが、それを資本制との関連でとらえるにいたらなかったのである。それではマルクス主義フェミニズムは、その理論にもとづいてどのような戦略をたてるのか。

これでいいのだと私は思う。性差別問題の重要性を強調するあまり、それに大きすぎるウェイトを与える議論よりも、それを社会の多様な変数のなかに、適切に位置づける試みのほうが、ずっと成熟した、ずっと将来展望のあるフェミニズムの理論的努力であるだろうからだ。

今問われる音楽文化の体質

演奏行為論を集めた第二巻
とにわかれていたが、その
内容もきわめて多彩であ
る。それは演奏家のエッセ
イという枠をはるかにこえ
ており、ほとんど『思想家』
と呼ぶにふさわしい。

演奏家の『著作集』が刊
行されるのはきわめて異例
メディアによってひらけた

のである。

そういう状況を考えてみると、日本にそれだけのをもち、きちんとしたシーをもって演奏活動している演奏家がどれくらいと問わずにはいない。何のポリシーもプログラムを何の思想

想のあし、量さ、グやグ

このことであるが、それはグ
ールドというピアニストの
ユニークさの証であると同
時に、これからの時代の演



多様な可能性を前にして、
自ら考え、スタンスを定め
てゆかなければならない。
そういうスタンスそのもの
が評価される時代になった
のであり、グールドに今与
えられている高い評価も、
彼の演奏そのものだけでなく
そのスタンスに対する評

、それも演奏家ばかり
任ではない。音楽を聴
しても、それを通して
を考えるとという習慣を
てこなかったこの国の
文化の体質全体が今問
ているのである。(わ
べ・ひろし氏＝玉川大
任講師・音楽美学専

このように考へれば、これまでの女性解放論が批判すべきものとなるのは当然だ。まず▲近代主義的なブルジョワ女性解放思想は▲「抑圧の構造」を分析する理論装置を……持たない▲ため、▲啓蒙もしくは運動論に帰着する▲（二二―四頁）。つぎにマルクス主義（社会主義女性解放論は、「再生産」「イデオ

概念をたて、女性の抑圧を独立変数として取り出した点が画期的だったが、それを資本制との関連でとらえるにいたらなかったのである。それではマルクス主義フェミニズムは、その理論にもとづいてどのような戦略をたてるのか。

これでいいのだと私は思う。性差別問題の重要性を強調するあまり、それに大きすぎるウェイトを与える議論よりも、それを社会の多様な変数のなかに、適切に位置づける試みのほうが、ずっと成熟した、ずっと将来展望のあるフェミニズムの理論的努力であるだろうからだ。

れてしまう。こうした抑圧の構造にはそれ相応の理由（物質的根拠）があるというのが、
オロギー”など継承すべき重要な概念をそなえているが、
ニズムは、より現実的で精密な理論になったが、衝撃力は
♀女性の抑圧は階級支配の従そのぶん低下した印象があ

マルクス主義フェミニズムの
主張である。

属数々(四頁)だとして考
えない。またラディカル・フ
性差別の相対的な説明力はま
すます小さくなるだろう。そ

このように考えれば、これまでの女性解放論が批判すべきものとなるのは当然だ。ま

概念をたて、女性の抑圧を独立変数として取り出した点が

れでいいのだ」と私は思う。

性差別問題の重要性を強調す

す。近代主義的なブルジョワ女性解放思想は、**「A」**「抑圧の制との関連でとらえるにいたらなかった」のである。

……持たない。ため、**▲啓蒙**
もしくは運動論に帰着する。**▽**
ミニズムは、その理論にもと
づいてどのような戦路をたて

ルクス主義（社会主義女性解
放論）は、「再生産」イデ
エミズムの理論的努力であ
るだろうからだ。

エミニズムの理論的努力であるだろうからだ。

過去をなぞっただけの甘さ

●橋爪大三郎

「産経新聞」90年2月27日(夕)

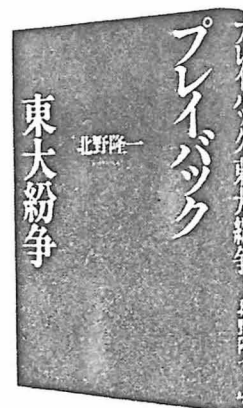
現役の東大生が、二十年前東大を吹き荒れた「学園紛争」の嵐を回顧する。往年の主役たちを軒並み取材と聞けば、どう料理したのかと興味が湧く。全共闘をやっていた私は、なおのこと期待して頁を開いた。

だが読んでみると腹が立った。滅多にないことである。そのうち怒りを通り越してがっかりし、読み終わるころには著者が気の毒になった。複雑な心境である。

この本だけ読んで、あの時代をわかってもらうとする若い読者もいるだろう。注意を喚起するいみで、どうして腹が立ったかきちんとおぼえておくことにする。

まず題名「東大紛争」がけしからん。大学当局や文部省にとっちゃ迷惑な「紛争」だったかもしれないが、当時の学生はひとり残らず「闘争」と言っていた。著者は「二十年前の一連の動きを、どう評価したらいいのかいまだわからない……あれを自分のものとして「闘争」と呼ぶ勇気はない」(自分なりに距離をおいて「東大紛争」に取り組みなかった)とのべている。だがその割に新し

『プレイバック「東大紛争」』

北野隆一著
[講談社 1000円]

い発見はない。よくあるイメージをなぞっただけで終わった。

本書は、東大新聞の連載をもとにしている。連載を読んで、写真家の浅井慎平さんが「僕は正直言って、物足りなく思った。当時何があったのかということはもう分かっていることだ。大事なものは、それをとらえた君の世代がどう受け止め、考えたか。そこが一番知りたい」と感想をのべたというが、同感である。

この種の書物が成功するには、①過去の事実を丹念に

と思った。

事実関係でも、オヤと思う記述が多い。(全共闘から生まれた赤軍派)はでたらめ。(全共闘と民青の反目は：結局感情的な近親憎悪を論理でカムフラージュしたもの)とあるが、両者の体質が正反対なことは組織原則の違いからも歴然だ。全共闘Ⅱ(新左翼のセクトの連合体)が誤認。

著者北野氏は、法学部四年に在学中。東大闘争の前年一九六六年に生まれ、入学後ずっと東大新聞の記者だった。新聞社に入社が内定とあるが、本当のジャーナリストを目指すなら、しばらくフリーで筆一本の修業をお勧めしたい。

(はしづめだいさぶろう・東京工業大学助教授)

本そのものが祈りに

●鶴見俊輔

「朝日新聞」90年4月22日

この本を読んで茫然とした。田村義也の装丁も見事で、本そのものが、ひとつの祈りとして、ここにある。

この人は自分の読んだ本も、身ぶりにかえてしまう。学者の書いたアフリカの本に、サルとなりあわせにな

『花をたてまつる』

石牟礼道子著
[葦書房 1500円]

ったことが書いてあった。大草原の夕暮れどき、彼がふりむくと、年をとったサルが近くの岩の上か樹の上かにいて、おなじように夕陽をながめていた。

「祈るといふことはどういふことかなと、わたくし思い